

## 仏壇の小型精密化に関する研究

企画支援部 ○藤田純一, 山田淳人, 恵原 要\*  
研究主幹(企画支援担当) 中村寿一  
(\*現 (公社)鹿児島県特産品協会)

### 1. はじめに

南九州市川辺町は、全国有数の仏壇の産地として知られている。川辺町で生産される川辺仏壇は、平成6年度の生産額116億円を境に、平成22年度には18億円と全盛期の6分の1まで減少している。特に材料部門といわれる木地、彫刻、宮殿、金具、塗り、蒔絵がこれまでにない厳しい事業環境に置かれており、これは海外製品の流入で生産が減少したのも要因の1つとしてあげられるが、宗教観の変化や、和室、仏間の減少などといった生活様式の変化も大きな要因と考えられる。

そこで、和室の減少に伴う生活スタイルの変化や、マンションなど省スペースに置ける仏壇のニーズに対応するため、川辺仏壇の伝統的な形である仏壇の本体を小型化するだけでなく、内部の彫刻や宮殿、蒔絵、金具などの部品も小型化し、荘厳さを兼ね備えた仏壇を、川辺伝承七職会（以下七職会）と共同で開発することとした。

### 2. 小型仏壇の検討

仏壇を小型精密化する上で一番の課題は、仏壇サイズをどこまで縮小するかということであった。現在市販されている仏壇は、手のひらサイズのものから一般の仏間サイズまで多種多様である。小型精密化に伴い、当然部品も縮小される。七職会の会員は、全員が40年以上の職人歴を有する熟練した技術を持つ職人であるが、部品が小さくなれば製造困難な部材が生じ、精密加工を得意とするレーザー加工機にも限界があることは予想出来た。

そこで、最初の取り組みとして地元博物館にて所蔵されている川辺仏壇のはじまりといわれる仏壇など3タイプについて、段ボールを使って外形サイズの検討を行い、縮小する部品サイズの検討などを繰り返し行った。そして、元祖といわれる仏壇（図1）のサイズをモデルに試作を行うこととした。これには、七職会の取り組みとして、再度仏壇を見直し、原点に帰るという思いもあった。モデル仏壇の奥行きに関しては、安定感に欠けていたので、奥行き方向にさらに4タイプを段ボールを用いて作製し、仏壇として安定感のあるものを選んだ。サイズ決定後は木地の職人により内部の構成などを決定し、製造に取りかかった。



図1 元祖型仏壇

### 3. 先端技術を用いた仏壇部品の製造

今回の小型精密仏壇の製造は、現代の加工技術と伝統工芸技術の融合を目指した。そのため、レーザー加工機の利用は、手加工困難な部品のみとした。木地部品では「障子」といわれる部分により細かい加工を施すことで、小型精密化された仏壇の魅力が増すため、レーザー加工機を使った多彩な障子の提案を行った。レーザー加工した障子部品の一部を図2に示す。

彫刻部品は仏壇の欄間部分に主に使われる（図3）。小型精密化する際、彫刻部品の外形切断は、手加工では困難な部品が出てくるため、部品の外形をレーザー加工機により切断し、それに彫刻を施す手法を採用した。当初、七職会会員には、レーザー加工機による切断に戸惑いが見られたが、製造上

有効な手法であることが判った後は、円滑に活用できた。

宮殿は、仏壇内部の「屋根」を構成する部材である。小さく複雑な形状で、数多くの部品を組み合わせることで製造されるもので、これにより仏壇の荘厳さを醸し出している。レーザー加工機により切断した部品の一部を図4に示す。図中上部の部品は、主流サイズの部品である。

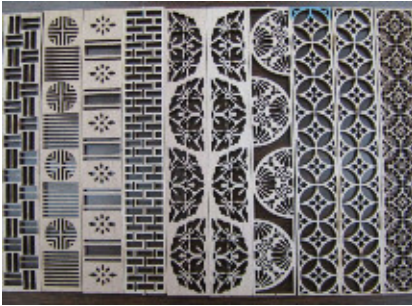


図2 障子部品



図3 彫刻部品



図4 宮殿部品

蒔絵は、主に仏壇の「猫戸」といわれる部分に描かれる。「猫戸」部分は、小型精密化する仏壇においてその細かさを一層強調する部品である。製造側にとっては、その技術力の高さをアピールできる点もあるが、ただ単に細かいだけでは何が書いてあるのか一見してわからないという声も聞かれ、これまで書いていた図柄をそのまま縮小して描くというだけではなく、視認性と完成度を高めて仕上げる必要がある。そこで、コンピュータを利用して、日本の伝統文様などを参考に蒔絵柄50点程度を提案した。その一部を図5に示す。



図5 蒔絵柄

#### 4. 結果

完成した小型精密仏壇を図6に示す。幅215mm（扉開時453mm）、高さ358mm、奥行き185mm、重さ2.7kgで、従来主流品の大きさの約1/3である。従来品と同じ7工程を組み込んだ内部構成で、レーザー加工機と職人の伝統工芸技術を融合させて仏壇の荘厳さを醸し出し、欄間、扉の障子、蒔絵、漆の色は好みのデザインを選択でき、オリジナルな仏壇の製造が可能である。この小型精密仏壇は、地元の住職により「宝光」と名付けられ、各種展示会に出品し好評を得ている。



図6 完成した小型精密仏壇

#### 5. おわりに

川辺産地においては、現代化や洋風化など様々な試みが行われてきたが、金仏壇の産地であるが故にその域から脱せない感があった。しかし、今回仏壇の小型精密化において、品質の高さを保ち続けることが出来た背景には、一貫して金仏壇を製造し続けてきた産地の強みが根底にあると考えられ、川辺の仏壇職人の技術力の高さを再認識する機会となった。

仏壇製造の7工程が残る川辺産地は、その地域のみで国産仏壇が製造できる貴重な産地となっていくと思われる。これからも仏壇製造に係わる企画や技術的課題に対し積極的に支援していきたい。